

最強の楯

「ご近所からカボチャを頂いた。

御礼を云って玄関先で手にした時の、その重さにびっくり！

サイズは小振りのバスケットボールを扁平にした程度。あまりにもサイズと重さのギャップに驚いたのだ。

早速、妻と重さの予想をした。妻は五キロ以内、僕は十キロ。

はかりを覗き込んでびっくり！三キロだ。思わぬ重さに、その身なり以上の評価をしてしまう。妻は、日頃買ひ物で砂糖やお米の重さを知っているの、見当がつくのだろう。

さて、このサイズでこの重さ、切るのが大変厄介、と妻。はっきり云って、失礼ながら「有難迷惑」というほどの代物。

あまりにも危険で難儀となるのが不安なため、

切断は、僕がやる！と強引に決めて、カボチャを安定させる敷物を据え、刃と柄が一体となったステンレスの三徳包丁を構えて、いざ！ここから、四苦八苦の格闘が始まった。

（なお、この僕にとって、次元の高い家事手伝いと相なった）

.....

目の前のカボチャは、ただただ目をつむったように平然として
いる。

まず、わずかに残った真ん中の茎の出っ張り。その周囲に包丁の先端で切り込みを入れ、汗かくまでもなく何とか取り除いた。さて、ここからである。茎を取り除いた方をウムを云わせず下に伏せて安定させ、包丁を当てがって体重を載せた。我が身が軟弱で軽いせいなのか、カボチャはあざ笑うようにびくともせず、手元がぐらついたら大怪我をしかねない怖さすら感ずる。今度はシンソーを揺らすようにしごいてみた。刃が入って行く。

そうか、この要領だな・・・

結局、真半分にすることはすったもんだしながらも完遂。ここからは電子レンジなるもので温めたら、嘘みたいに柔らかな展開となるではないか！

敵なるカボチャは、割って入れれば、そして温かく接してみれば、柔らかく何でも受け入れ、内はすこぶる甘い別世界であったのだ。突入前の、あの鉄壁のような硬さは一体何だったのだろうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・

しかし、僕はもう再び挑戦する気にはならない。もう、たくさんだ。

ふと、思った。

あゝ、そうか！

たかがカボチャだが、どうしてどうして、外から攻める気持ちを抱かせず、一切武装で固めることもなく内界？は穏やかな平和を実現する「最強の楯」で装っていたのだ。大したもんだ。

(ウン？どっかで聞いたことある著書の内容だ)

少し飛躍させて頂いて夢見るなら、

一国に例え、「攻める気持ちで周囲に持たせない」ところが大
事なところでないだろうか。

つまり、近隣諸国と官民挙げての親和交流（経済交流や災害援助、文化・芸能・スポーツ等）を地道に続けるようなことなのかも知れない。御国自慢の「お・も・て・な・し」を以って。

そうして・・・

(いや、調子に乗り過ぎたようで)

